
その距離に溺れる

睡眠に溺死

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その距離に溺れる

【Nコード】

N9042Q

【作者名】

睡眠に溺死

【あらすじ】

ゆうとあきと少しの愛情交差 墮落ほど楽しいものも切ないものもないんだよ。言いたい事はそこじゃないけど。

見て見て　でも見ないで。

耳を圧迫する爆音にキリキリする程眩しいステージ。

物心ついた時からこの世界が好きだった。過剰な装飾に個々のイメージで創り上げて競う。

嘘くさい馴れ合いも今だけの遊びも。

酒に飲まれたしゃがれた声で夢を歌い、信じているのか信じるふりか分からないオーディエンス。

高揚　興奮　小さい宇宙　ミラーボールが照らしてくれる

「あつ、今日来てたんだ？」

あーもう、窒息しそう。

公立の小学校で私学の中学への勉強に励んだ。高卒の親の学歴コンプレックスに付き合わされる毎日の繰り返し。

頑張ったと思う。県内で三番目の学校が希望だった。塾の先生が勿体無いから一番の所に進学を進めてくるくらい　毎日勉強漬けだったし、それでいつも不機嫌なママが笑ってくれるから辛い訳はないけど義務的な気持ちとやりがいでの勉強の毎日を過ごした。そんな努力も笑われたように、お兄ちゃんが公立高校の受験に失敗して第二希望の私学に入学する事になった。まあ、そんな訳で普通の家庭で私学二人も行かせれませんと言われるまでの勉強の日々は三年間ののち幕は閉じた。

ママはごめんねと目を反らして後ろめたそうに私に言うけど、残念だなという私の頭の中はそんなもんかと冷静な諦めだった。お父さんと呼んでもいいのかと戸惑うようなお父さんは私が保育所の頃から異性絡みでママを泣かせ、天性の浪費家でママを怒らせ、暴言や

暴力でママを追いつめた。

週一で耐えきれなくなったママは爆発したかのように狂って定番化した怒鳴り声にお兄ちゃんと笑いながら泣いていた。

お父さんは少し常識的なことが出来なくて、ママはいつも尻拭いしてお父さんを立てていた。そんなママをバカにするお父さんは、かなりの見栄張りで、恥ずかしがり屋のお兄ちゃんは運動会でも演奏会でもお遊戯会も目立たないから、行つて見る程でもないとお父さんは来てくれなかったらしい。私はそんなやり取りの中でお父さんがどんな子供で居てほしいかなんて分かり切っていて、積極的に何でもした。目立つこと、少しやんちゃに降りまうこと、自分の事は下の名前で呼ぶ事。

お父さんは見に来てくれていた。ママもお兄ちゃんも、家族が揃って笑顔で居てくれる瞬間。

公立の中学に入ったら、お兄ちゃんは少し有名だった。お兄ちゃんの卒業と入れ替わりで入学した私はお兄ちゃんが仲良くしてた後輩、私の二個上の先輩、一個上の先輩が声をかけてきて知った。良い意味でばかりではないけど、少し鼻が高かった。ママがお兄ちゃんを怒鳴ってた意味も知ったけど。

私の視野、生きてきた世界の小さい事に気が付いた。

ママはパートに出てたけど手が離れたといつて嬉しそうにすぐに正職員になった。元々一代で土地を広げた農家の娘のママは家が貧しい時も味わっていて、親のお手伝いで毎日働いてたことを親孝行と思つて幸せそうに今でも時々話してくる。

根っから働くのが性にあつてるんだと思う。

中学に入る時、ママはまだ罪悪感があるのか知らないけど「家から近いし、難しい勉強もないからのんびりできて良いねー。」ってニコニコして言ってくれた。言われるまでもなく中学受験を止めたため、塾も辞め、のんびりと毎日嘘のように平和の象徴のよう

な生き方をしていた。時間にとらわれるのは元々私には向いてなかったみたいで、お散歩して遅刻、寝坊して遅刻、朝風呂のため遅刻遅刻と言えは私でしようと言われるまでに成長した。墮落したと言われればそこまでだけでも。

そんな感じで中学を入学すればアナーキー扱いで、自分自身の気持ちと人からの対応に少し困ってしまったりした。でも、お兄ちゃんの影響を頭から被って生きてきた私は何となくいけるといいう物へ手をのばして、音楽、プロレス、化粧、ネイルと気が向くままに手を出して遊んで感じていた。少し皆と自分は目線が違うんだなとはみ出ることも気にしなくなっていた。

ちよつと派手くらいが心地よくて、理解されなくらいがベストかな。なんて思ってた時にちよつと手にしたCD。

誰にも影響受けずに自分が見つけた世界だった。

過剰な装飾に現実をシャットダウンしたかのような色が広がる音。確かに今まで洋楽を先取って聞いてた私には音質に関しては耳が痛いものだったけど それ以上に周囲には理解できないであろう空間に自分の居心地の良さを感じた。

そこからは もう水を得た魚のようにその世界にどっぷりだった。お年玉をためてきた貯金通帳もすっかり使い込んだ。不安に感じることもなんか一瞬たりともなくてそのジャンルにどっぷりだった。インディーズからメジャーまで何十とバンドあるわけで、飽きもせず毎日毎日聞き込んだ。

メジャーのトップになつてくると、音楽批評家や、J-POPの有名なアーティストが懂れてます！なんて言う事もあるくらいだから、自分の好きなこのジャンルに自信をもっていた。

すごく好きなメジャーバンドのボーカルはファンの中では教祖様が神様といったノリで、またそんなふざけた盲目ごっこも堪らなくサブカルちつくで楽しかった。

そのバンドの1番オシャレを超えた芸術的な服装をしていたベースの人が必ず1アイテム入れていたブランド。

そのブランドに憧れて、過剰なフリルや退廃的な色にモチーフの服にそのブランドのアクセサリーを付けたくてたまらなかった。もう服装までその世界に浸食され始めた頃にはママはおかしくなっただと思い必死でとめてきたけど、ずっと明るく振舞っていたら何時の間にか諦め始めた。もう絶好の趣味への没頭期間だった。

特にMDプレイヤーを買ってからは授業でたと思えばMDプレイヤーで音楽をこっそり聞いてご飯の時間にはプラリと校庭の噴水前に寝転がって音楽聞きながらパンをかじってた。

登校前の朝は最高に気持ちが良い風がふくから公園のベンチは最高なベッドで、つけ爪のように伸ばしてグラムのにラメを塗りたくった爪をかざして、校則など気にもせず空けまくった耳たぶのピアスをいじりながら家の梅酒をキンキンにひやして水筒にいれたものを飲んでヘラヘラ墮落した生活。その生活に足される音楽。墮落を肯定するかのような音楽はたまらない。

友達に居る。しかも皆良い人。面白いし、私を咎めないし。アナキーなんじゃなくて気まぐれな猫みたいって、笑ってくれた。その言葉は嬉しかった。だって猫が大好きだから。猫は可愛くて綺麗で儂い。そして冷たい。

わかってる。人間はさみしがりやさんが多いから、イジメの標的を作って自分を守ってる。1人じゃ寂しいもんね。

でも猫は1人がまるで好きかのように餌の時ぐらいしかすりよって来ない。そんな猫にすりよられたら堪らなくて顔面崩壊したような笑顔になってしまう。

そんな猫に私はなりたい。

「ね、あきつて友達紹介してもいい？」

友達からいきなり友達の紹介。たまーにある。でも今日はなんか違った。

「ねー、ね、ね、ね。」

甘ったるい香水。フローラル系の私の香水の匂いとまじる。
見上げれば 匂い通りな甘い女の子が立っていた。

「プリクラ通りだあ。可愛いーなあ。ゆうちゃんって呼んでいいー？」

この子は怖いものなさそう。とかぼんやり思ってる私との熱の差。

「あ…きちゃんかな？」

まあ、分かりきってるんだけど場の流れを、私への興味を薄めたい。
「うんっ。」

動く度に甘い匂いが鼻をかすめる。

「なんかカフェ入るっか。あきちゃん。」

戸惑うことなく繋がれた手にギョツとしたけど驚くほど早く馴染んだ。

また見た目通りの甘そうなキャラメルソースのかかったキャラメル
アイスクリームを食べているあきちゃんを前に私はカフェオレを
する。

「あきね、ゆうちゃんのプリクラ見たとき運命感じたの。その上同
じ年だなんて聞いちゃったから、会いたくて。」

かなりの電波なのか天然なのか計算なのかよく分からないまま詮索
も面倒で辞めた。

ただ、かなり赤を強くいれた茶色の私の髪とあきちゃんの甘いベ
ージュ系の茶色は対照的なのに揃いみたいで“運命”って言葉をす
んなりと頭に植え付けられてしまったかのようだった。

あきちゃんとは毎日連絡取るようになった。

「あきと上手くやれてるー？」

紹介した子が聞いてくる。

「あ、なんかねー、なんだかんだでね、毎日連絡とりあってるかな。」

正直に。言われてみれば連絡とりあってるんだと思う程自然な行為になっていた。

「ゆうちゃん凄いな、あきって掴みどころなくてっていつかつかめないんだけど。」

純粹に驚いてる友達に逆に私が驚いた。

掴みどころとか考えた事もなかったな。

「そうなのかな。特に何も感じないけど。」

少なくとも私は好きなんだと思う。

「あきはゆうちゃんと似てる所あるけど、やっぱり違うよ。」

「似てる所がある事にびっくりただけだね。」

ははっと適当にわらったけど、何処が似てるのかどこが違うのか、少しだけきになった。

「あきさ、ほんとゆうちゃんに対して興味っていうかさ、はじめてプリクラ見せた時からずっと聞いてきてさ。」

ふーん、想定内だし、運命かんじたらしいしね。

「あの子男癖悪いし、さ、女の子とも広く浅くだし。あんまり。」

友達の私が言うのもなんだけどって言うその子は浅く付き合われている1人なんだろう。

「そっか、ありがと。頭に入れとくね。」

軽く流して、別の話題に変えたらすんなりその子は話に乗って笑顔を向けてくる。

善し悪しは私に関わるなら私基準以外何もない。

今日も鼻をかすめにくる甘い子。何食べたらこの子が出来上がるんだろう。

「ゆうちゃんっ、ねえ。ゆうちゃん。」

この子は糖分何%はいつてるのかな、なんて考えてたら目の前のあきちゃんは私に話しかけてきたいた。

「あきちゃんどしたの？隣おいでよ。」

ソファにすわってる私の目の前にべたりと座って膝に手をのせてるカーペット引いてるけどソファあるんだから。と手招きすれば嬉しそうに横にくる。

この子の何処が掴めないのか。

あきちゃんは家に良く来るようになった。

ギリギリとし暗めの私の服とは対照的に白にピンクに甘いきらきらとしたあきちゃんの服。

でも私と同じブランドのアクセサリーを付けていた。

インテリアをチープながらも凝ったこの部屋をあきちゃんは凄く気に入っていた。

私の使っている香水と同じアロマを焚いたときあきちゃんは上機嫌になる。

甘いあきちゃんに匂いが付くから申し訳ないなんておもってたけど、機嫌良いみたいなので気にせずに来る度に焚いていた。

あきちゃんは私の全てを肯定した。

好きなアーティストもいくつか被っていた。でも被っていない知らないバンドを教えて教えてと聞いて来た。

一緒に共有する事が初めての私は不思議な居心地の良さを覚えた。

「だめかなあ？」

あきちゃんの知り合いがライブするらしくパスを出して貰ったから行こうと誘われた。

断る理由なくすぐに行こうかと答えた。
あきちゃんは糖分高めの笑顔をくれた。

私はこの子にお願いされて断る事ってこれから先あるのだろうか。
身を滅ぼさないようにだけはしようと心の中で苦笑いをした。

「ゆうちゃあん、おはよー。」

「おはよう、あきちゃん。」

一瞬、あきちゃんの動きが止まる。時間が止まる。

「どしたの。」

心配になって顔を覗かせた。

「ゆうちゃん、今日いつもと違う？よね？」

ああ、半年ぶりに、メイクと髪型を変えたからかな。そういえば最近メイクも一定化してたなと反省してしまった。

あれ、でもへんだったかな。普通にそんなに気づく変化ではないとおもったけど凄いなあきちゃんは。

「少しね、久しぶりに自分を更新したんだよね、」

ははっという意味分らないかと笑えば甘い匂いが戻る。

「すごく好き。ゆうちゃんはほんと綺麗だもん。あき、ゆうちゃんが少し変わっただけでもすぐに気づくよ。」

自信たっぷり笑顔を向けるあきちゃんはとても可愛いくて男だったら幸せにしたげるんだけどね、なんて馬鹿げた妄想をしてしまった。少し自分の思考回路がおかしくなってきた事にはまだ気づかないフリをしていたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9042q/>

その距離に溺れる

2011年10月8日17時36分発行